

# ハランベの死に思う

HSUS（全米人道協会）会長、ウェイン・パチェリ

誰がこの死に関する責任を負うべきかはわからない。母親の手をすり抜け動物舎に入り込んだわずか40ポンドの男児に、420ポンドの巨体が危害を加えるかもしれぬという非常事態に見舞われた。そして、絶滅危惧種である雄のゴリラがシンシナティ動物園の管理者らに射殺されてしまったというこの痛ましい事件に、私たちは皆心を痛めている。

このような状況下における倫理的行動とは…と考えた時に、私は30年前に大学において動物の権利擁護団体を設立した際に学食などで友と交わした議論を思い出してしまった。自分の身が危険にさらされていればクマを殺すか？ 暴走列車の進行方向をスイッチ一つで変更できるとしたら、一人の人間を殺す方向か5頭の動物を殺す方向、どちらを選ぶか？ 定員が限られている救命ボートに溺れている人間一人を引き上げるためには愛犬を海に投げ入れなければならないとしたらどうするか？

このような救命ボートのシナリオに現実で遭遇する機会はないために、このような質問は単に好奇心、我々の動物に対する責任はなんであるかを考えること自体への攻撃、そして、人間を倫理上優先させるべきであるという考え方の強化などの上に成り立つものなのであろう。

しかし伝統的に動物を活用してきた者たち、特に生物医学研究に従事する者たちは、これらのシナリオを自らの専門職の狙いや都合に合わせるために利用してきたのである。彼等は必ずしも結果を保証することができない場合においても、癌や心臓疾患などの治療法を見つけるためにはネズミ、犬、猿などを活用することが必要であると主張してきた。一般的な見方をすれば、何十年たった今でもまだそれらの治療方法を私たちは見つけられずにいる。そしてその間、何億もの動物が多少の進歩に対して命を落としてきたのである。

ゴリラの囲いの中に子供が落ちてしまったという過去の事件を振り返ってみると、これらの巨獣はむしろ救出者の役割を果たしている。ハランベの行動を見てもわかるように、彼らの本能的行動は「保護」である。

私があの時シンシナティにいたならば、まずは麻酔銃を使い、状況の悪化に備えバックアップとして射撃者を用意したかもしれない。しかし現実問題として私があの場合にいたわけでもなく、実際の非常事態に遭遇した人々の動きがどうであったかを分析することは困難である。今、シンシナティでは皆、心に重荷を抱えていることであろう。

しかし人間が動物の命を絶つという状況の大半においては、このような倫理的ジレンマは存在しない。ゴリラ対男児、牛対女児、ゾウ対人間…このような場面はないのである。むしろスポーツや娯楽の対象として、毛皮などのファッションのために、あるいは人間の食の嗜好を満たすために、大量の動物たちが殺されているのである。

トランプ家の男たちがアフリカにゾウやヒョウなどを狩りに行く時には、彼らは言うまでもなく「意図的に」その行動をとっているわけである。(何万ドルも投じ7千マイルも旅し、生息地でその家族とともに自分たちの生活を営んでいる希少動物たちを殺すというお遊びをしにいくのである)。

人間が毛皮をたとえば20匹以上のボブキャットの悲惨な死をまとうことになる。「本物」を着なくとも合成繊維や天然繊維などの商品で十分に間に合わせることができるにもかかわらず、このような毛皮を着る人々がいる。

意図的に動物に毒物を与えたり、刺激物を彼らの眼に流し込んだりすることなく、安全な商品を市場に送り出している何百もの会社が存在していることを知りながら、化粧品の実験を依然として続けている会社もある。

ハランベの死は皆で悼むべきである。しかし動物園の職員たちは後悔の念にかられながらも、このような危機回避策を取らざるを得なかったことも認識するべきであろう。同時に我々人間は各自、そして社会全体として同等な、もしくはより有効な代替策があるにもかかわらず、自分たちの欲を満たすためだけに動物たちを殺すことが果たして許されるのであるかどうかを考えてみようではないか。人間が日々遭遇し続けるシナリオは、救命ボートや暴走列車のそれではない。日常の課題は明確な倫理的選択、常識、そして人間的良識や品格で対応できるものである。

ハランベに対する追悼の意を表する最良の方法は、我々人間と動物たちとの関係を今一度しっかりと皆が考えることであろう。